

『水行 10 日陸行 1 月』は纏向への旅だった

令和元年 10 月出版『九州の邪馬台国 v s 纏向の騎馬民族』より

2020 年 3 月 5 日 樋田 鉄男

魏志倭人伝には邪馬台国の場所として『南、邪馬壹国に至り、女王の都する所にして、水行 10 日陸行 1 月』とある。この『水行 10 日陸行 1 月』は江戸時代から続く邪馬台国論争においてずっとその主役だった。そして、この旅程をもとに多くの人達が邪馬台国の場所を求めてきた。しかし、誰も納得できる解が見出されたとは未だに言えない。これほど長く議論されてもその答えにたどり着けないと言うことはこの情報が間違っただけのものか、それとも信用できないものだったに違いない。

近畿説の場合はハッキリしている。南を東とすれば、旅程上はおかしくはない。なぜ東を南としたかの理由については魏にとって邪馬台国を南にあったように見せたいと言う何らかの事情があったとし、いくつかの説が提案されている。そして、この旅程は近畿説の一番の拠り所であり、この旅程なしでは近畿説は成立しない。しかし、九州説の場合は容易ではない。明らかに長すぎる。そのため狭い九州内に無理矢理この旅程を当てはめたり、北部九州を大きく迂回して南九州やはるか南海上に邪馬台国を求めたりしなければならなかった。そして、論争は果てしなく続いてきた。

この旅程には明らかに 2 つの矛盾がある。

矛盾その一；邪馬台国は遠絶ではなかった

魏志倭人伝には投馬国と邪馬台国以外の国々は里程でその場所が示されている。そしてその文面に従えば、いわゆる放射説が正しく奴国、不弥国と投馬国、邪馬台国はいずれも伊都国を起点とした里程であり旅程であったと思われる。

しかし、邪馬台国の場所を示すヒントは『水行 10 日陸行 1 月』だけではない。『女王国(邪馬台国)より以北、其の戸数道里得て略載す可きも、其の余の旁国は遠絶にして詳らかに可からず』と言う文章がある。つまり「邪馬台国より北の国は戸数や道里など概略は分かるが、それ以外の国は遠くて詳しくは分からない」とされている。ここで戸数や道里が記載されている国々は伊都国や奴国など玄界灘沿岸にあったと思われる国々であり、『其の余の旁国』とは名前のみが記載された 21 の国々と思われる。そして水行 20 日とされ戸数の記載のある投馬国をどう考えるか課題は残されるが、邪馬台国も同じく戸数の記載があり玄界灘沿いの国々に含まれると考えられる。そうすると『其の余の旁国は遠絶』としていることから邪馬台国は遠絶ではなかったということになる。『水行 10 日陸行 1 月』もかかる旅ではなかったはずだ。

また魏志倭人伝には帯方郡から邪馬台国までの距離を 12000 里とある。伊都国までの国々の里程を累計すると 10500 里であり、それを差し引くと 1500 里となる。この里程をいわゆる短里の 80 メートルで換算するとおおよそ 120 キロメートルほどになり、これが伊都国から邪馬台国までの距離と言える。この事からも『水行 10 日陸行 1 月』もかかる程、遠かったとは思われない。

矛盾その二 ; 陸行 1 月は徒歩では無理

活発な運動習慣を持った成人男性が 1 日に必要とするエネルギーは 3000 kcal である。米食は 100 グラム 168kcal であり、仮に必要なエネルギーを米食だけに頼ると 1 日約 1.8 キログラムとる必要がある。1 ヶ月歩き続けようとするれば、食料だけで 50 キログラム以上の荷を背負うことになる。他に水も必要だし、米だけでは栄養失調になる。米以外の食料や狩りの道具を背負えば荷はより重くなり、指揮官の荷を従者が背負えば一段と増える。そして大量の荷を背負えば 1 日の歩行距離も短くなる。

魏志倭人伝では末慮国への行程を『草木茂盛し、行くに前人を見ず』と表現している。当時の道が獣道に近かった事が分かる。駅制ができたのは 7 世紀であり途中食料補給は出来ない。魏志倭人伝には倭国には馬はいなかったとしているので歩いて行くしかない。しかし、50 キログラムを超える食料を人間が背負い獣道のような道を 1 ヶ月も旅するのは容易ではない。これらのことから陸行 1 月の旅は当時困難だったと考える。

『水行 10 日陸行 1 月』は何が間違っているのか

このようにこの旅程には大きな矛盾が存在する。『水行 10 日陸行 1 月』の記載には何らかの間違いがあったに違いない。それを探すには晋書や梁書にある 266 年の晋(西晋)への朝貢がヒントになる。九州説を唱える山科威氏は全邪馬連の研究発表の場でこの時の朝貢は邪馬台国東征後であり、使者は奈良からの旅程を報告したと発表した。そして、三国志の著者・陳寿はそれを勘違いして魏志倭人伝に記載にしまったと言うのだ。

筆者は九州説だが東征説は取らない。ヤマト王権発祥の地である纏向遺跡は奈良県桜井市に 3 世紀に誕生した遺跡だ。そうすると卑弥呼のいた時代に纏向遺跡はすでに存在していたことになる。纏向遺跡は九州の邪馬台国と並存していたことになり、東征説は成立しない。纏向遺跡からは九州の土器がほとんど出ていない事もその理由であり、九州から近畿へ人の移動があったようには思われぬ。そのため東征説では一般的に纏向遺跡の誕生を 4 世紀としている。

266 年の朝貢を梁書でみると『また卑弥呼の宗女・台与を王にした、その後再び男の王が立って並んで中国の爵位を得た』とある。卑弥呼の後を継いだ台与と共に男王が並んで爵位を得たのだ。この時の男王が誰だったのか昔から議論されてきた。266 年時点では纏向遺跡は誕生していた。そうすると使者は邪馬台国の女王・台与と纏向の男王の 2 人の使者だったとすれば、全て辻褄が合う。筆者は纏向遺跡は騎馬民族の扶余が作り始めたと考えている。そして、この男王の使者は馬と船を利用して九州まで行き、その旅程が「陸行 1 月水行 10 日」だったと考える。奈良から中国山地を馬で 1 月かけて縦断し、島根県の石見辺りで日本海側に出たのではないだろうか。そこから船で九州まで 10 日。九州から晋までの旅は台与の使者と共に行ったことになる。

朝貢の時、この使者は邪馬台国から来たと言った。この時点での倭王は邪馬台国の台与であり、邪馬台国から来たと言えなければならなかったのだ。しかし、その時、纏向からの旅程を述べた。当然、これを聞いた役人は邪馬台国に行くには水行 10 日陸行 1 月もかかると勘違いする。陳寿は 268 年から晋で

三国志を書き始めている。彼は当然この情報を得たはずであり、同じように勘違いした。そして魏志倭人伝に邪馬台国への旅程を『水行10日陸行1月』と書いたのだ。このことが邪馬台国論争を300年も長引かせてしまったことになる。

卑弥呼の死後、倭王になろうとした名前のない男王

魏志倭人伝には卑弥呼の死後『更に男王を立つるに、國中服せず、更に相殺し、時に当たりて千余人を殺す』とある。この時の名前のない男王が誰だったのかもこれで推測できる。この王も纏向の男王だったと言える。筆者はこの男王は魏に滅ぼされた公孫氏でただ一人生残った公孫恭だったと考える。纏向遺跡には公孫氏の影響がいくつも見られる。この事が邪馬台国近畿説の有力な根拠とされてきた。

公孫氏は帯方郡を作り満州から朝鮮半島、倭国まで支配した一族だ。卑弥呼の最初の朝貢も元々はこの公孫氏だったと考えられている。しかし、卑弥呼が朝貢した年の238年8月に魏の將軍・司馬懿によって遼東で滅ぼされた。その時の王は公孫淵であり、公孫氏の多くが殺されたとある。しかし、前王だった公孫恭一人が司馬懿の温情で許された。彼は当然その地で幽閉されていたはずだ。翌年、公孫淵が孫権に求めていた呉の援軍が遅れてやって来た。援軍は遼東一帯を荒らし回って帰ったとあるが、公孫恭をそこに見出さなかったはずがない。公孫恭は呉軍に助けられ、日本に逃れ、纏向の地で扶余から担がれて王になったと推測できる。そして卑弥呼に倭王の地位を要求した。

三国志は晋の高祖である司馬懿の功績を讃えるための史書だ。しかし、公孫恭を許した事は司馬懿の失敗であり、魏志倭人伝に公孫氏の名前は載せなかった。上記の男王に名前がないのもそれが理由だ。だが裏事情を知らない晋書には「公孫氏を滅ぼしたため卑弥呼が朝貢できた」とその功績がしてしっかり書かれている。

(参考文献)

- ・白石太一郎『倭国の形成と展開』敬文舎 2013年
- ・渡邊義浩『魏志倭人伝の謎を解く』中公新書 2012年
- ・安本美典『「邪馬台国＝畿内説」「箸墓＝卑弥呼の墓説」の虚妄を衝く！』宝島社新書 2009年
- ・寺沢薫『王権誕生』講談社学術文庫 2008年